

未来に活かしたい、先人たちの思い

温故知新

時計塔と大壁画

第2回

《文教キャンパス環境科学部》



教養部(当時)の校舎増築の完成に合わせて設置された時計塔と大壁画。増築のための資金は、昭和41年に工学部が創設されるにあたり、県下一般から募った寄付金約8千万円が当てられた。環境科学部玄関ホールには、その経緯を銘記した銅板がはめ込まれている。

文教
キャンパス



キャンパスのシンボル

明治維新以降、次々に建築物に設置されるようになった時計塔。文明開化の時を刻むその姿は、文字通り近代化のシンボルだったでしょう。

以来、時計塔は時を報せるという本来の役割はもちろん、さまざまな建築物のシンボルや地域のランドマークとして、人々に親しまれています。

文教キャンパスの時計塔もまた、長崎大学のシンボルとして、大壁画とともに1966年(昭和41)に設けられました。

時計塔設置の経緯

昭和30年代も終わり頃、高度成長期という社会の進展の一方で、戦後の整備が大幅に遅れていた文教キャンパスは、総合大学として、各学部の恒久的な建物をいかに配置するべきか、熱心に検討が重ねられていました。

その結果、教養部(現在の環境科学部校舎)を中心にキャンパスを構成していくことが決まり、そこに、「大学のシンボルとして恥ずかしくないスマートな時計塔をぜひ、つくりたい」とキャンパス計画に熱心に取り組んでいた名取嘉四郎事務局長(当時)が提案。これが、時計塔設置のきっかけとなったのです。

時計塔と学園紛争

四方に大きな電気時計を掲げた文教キャンパスの時計塔。4階建て校舎の屋上からさらに伸びた塔の高さは約10mで、その内側は6畳ほどの空間になっています。

学園紛争の時代(昭和40年代)、教養部の建物が一時的に封鎖される出来事がありました。時計塔のある屋上では約4カ月間に渡って、「時計台放送」と称したマイク放送が、占拠した学生によって行われました。そんなものものしい出来事も、今は昔の話です。

有田焼のタイルによる大壁画

時計塔の下に、意匠として設けられた大壁画(6m×9m)。その直線の幾何学模様は、タイル・モザイクによるもので、デザインのアイディアは教育学部美術科の教員や学生から募りました。原画をまとめた夏秋克巳施設部長(当時)は、「由緒ある長崎大学に、永久に残る作品となると、とくに慎重を期さねばならず、昼も夜もそのことで頭がいっぱいでした」と後に語っています。

大壁画には、長崎のイメージを背景に、教養部を中心として6学部(当時)が協調している姿、*LAB ALTO AD ALTON*(高さより高さへ)という学問・研究の真理を探究する言葉の意味が織り込まれています。

また、タイルは特製の有田焼で、約9,500枚を使用。茶とグリーンでまとめられた色合いは、古典的な味わいを求めたもので、その色彩は今もほとんど色褪せていないようです。

かつては、正門から真正面に仰ぎ見えた時計塔と大壁画。いまでは、環境科学部前のクスノキ並木が成長して見えなくなりました。

◆ 出典／学園だより第27号(昭和47年2月)

学園だより第85号(昭和59年7月)